

## 飛行機の中で読むだけでフランス語会話ができるようになる本—イントロ（5）

塚田 泉

### 【いざ空の旅へ】

フランスへ行く時はエール・フランスに乗って行きなさいと本に書いた先生がいました。飛行機に乗った時には、もうフランスに上陸したようなものだから、というのがその理由だったように思います。

でも、今ではオテス・ジャポネーズ（日本人ホステス）もいますので、いきなりフランス語の世界に入ったという感じはあまりしません。どちらでもいいようなものですが、それでも、多少はムードの違いがあるように思います。

それに、大阪空港からの飛行機はJALとの共同便になりますので、いずれにせよ、エール・フランスの便で行くことになります。

そこで、さっそくフランス語会話の練習ができるわけですが、まずは、機内に乗り込んだ時には、並んで迎えてくれたオテスやスチュワルドの一人一人にボンジュールと言いましょ。

さあ、ジャポンからフランスのパリへ、12時間の空の旅が始まります。

飛行機は最初のカフェだと思えばよいのです。ただし、全席 non fumeur です。飛行機が飛び立ったら、おしぼりや軽い飲み物などをテーブルに配ってくれますね。一品受け取るごとにメルシを連発します。

何を飲みますかと聞かれたようだったら、カフェでもジュでもコカでもいいのですが、やはり何と言ってもワインですね。フランス語ではヴェンです。

「ヴェン、シルヴァープレ」と言えばよいようなものの、これだけでは済まないのがヴェンの注文です。

「ホワイト？ レッド？」とオテスが聞くかも知れません。何で英語なんだとばかりに、「ヴェン・ブラン、シルヴァープレ」と白いほうを注文します。フランス語では形容詞が後ろに付くことが多いのです。

赤いほうが良かったら、  
「ヴェン・ルージュ、シルヴァープレ」と言います。

これだけで、オテスのあなたを見る目が変わりますよ。尊敬か愛のこもった眼差しで見てくれますよ、きっと。

メルシと言って受け取るのを忘れずに。

あなたがビール党だったら、

「ビエール、シルヴァープレ」

もうちょっとソフトに言いたかったら、  
「ドゥ・ラ・ビエール、シルヴァープレ」と冠詞の「ドゥ・ラ」を付けます。これは液体につける冠詞です。

ヴェンに、同じように冠詞を付けると、  
「デュ・ヴェン」となります。「デュ」がちよっと読みにくいですね。フランス語の綴りで示せば du なんです。「ヂュ」と書いてもいいんですがね。

ビエールとヴェンでどうしてこうも違うんだと言われそうですが、そんなことは今の段階ではあまり考えないでください。

一つだけ違いを言っておきましょう。ビエールは女性名詞で、ヴェンは男性名詞なんです。ヨーロッパの多くの言語には、女性と男性の区別が何にでもあるんですよ。スペイン語も、イタリア語も、ドイツ語も、ロシア語でさえ。

名前は分からないけれど、あの小瓶のものが飲みたいという時は、それを指差して、  
「スラ、シルヴァープレ」と言います。

水が欲しい時は、日本語よりも口をすぼめて、  
「オ、シルヴァープレ」と言います。

これに、例の液体用の冠詞を付けて言えば、  
「ドゥ・ロ、シルヴァープレ」です。これのほうがオテスには分かりやすいかも。「オ」だけだったら、フランス人だってまごつきますよ。

もちろん、「エヴィアン」とか「ペリエ」という固有名詞を使うこともできます。両方ともフランス産のミネラル・ウォーターですが、「エヴィアン」は普通の水、「ペリエ」は炭酸水でしたね。

食事の時間の前には、オテスがムニユを配ってくれます。たいてい和風弁当か洋風弁当のいずれかが選べます。

オテスがシャリオ（ワゴン）を押してきました。和風弁当を手にとって示しています。  
それが欲しかったら、「ウイ」

もう一つの洋風弁当のほうがよかったら、「ノン」と言って和風弁当をいったん断ります。

今度は、洋風弁当を見せています。もちろん「ウイ」です。

食事をしていると、オテスがやって来て、尋ねます。  
「ヴーレー・ヴー・デュ・カフェ？」

おやおや、あなたがフランス語を話すと思い込んでしまったようですね。でも「ヴーレー・ヴー」なら覚えてるでしょ？ ほら、例の、スペイン人がブーレー・ブーと発音するやつです。

ちょっと古くなりますが、アバも「ヴーレー・ヴー？」（あなたは欲しいの？）という歌をうたっ

ていました。

「ウイウイ、メルシ、アン・キャフェ、シルヴァープレ！」知ってるかぎりの言葉を並べて、嬉しさを表現します。

何か用事があって、オテスを呼び止めたい時は、  
「パルドン、マドモワゼル」

どうしてもマドモワゼルに見えないオテスは、  
「パルドン、マダム」と呼びます。マドモワゼルかマダムか区別のむずかしい時は、マドモワゼルがお勧めです。

スチュワードを呼び止めたい時は、  
「パルドン、ムッシュー」です。なお、ギャルソンを呼ぶ時も、今はギャルソンとは言わず、ムッシューを使います。

もう一つよく使う言葉を覚えておきましょう。「良い」とか「おいしい」を意味する「ボン」です。おいしいヴェンを「ボン」と言って褒めてあげれば、オテスは喜びますよ。

「セ・ボン」（これはおいしい）という言い方もできます。「セ・シ・ボン」と言えば、シャンソンの題にもなります。

こんなことを喋りまくっている間に、アエロポール・ドウ・シャルル・ドウ・ゴールに着きました。

飛行機の出口に並んで見送ってくれる乗務員の一人一人に、  
「メルシ、オルヴァール」と言って、別れを告げます。

12時間の空の旅でしたが、そのうちの数時間を、「飛行機の中で読むだけでフランス語会話ができるようになる本」塚田泉著『へそ曲がりフランス語会話』（ビワコ・エディション近刊）に割いていただければ、あとはばんじゃくです。

税関の手続きも問題ありません。

タクシーで「北ホテル」まで行くのなら、  
「オテル・デュ・ノール、シルヴァープレ」の一言で決まりです。

行き先が「パリ・ホテル」なら、  
「オテル・パリ、シルヴァープレ」

ただ、運転手がこのオテルの所在地を知らないことがありますから、オテルのアドレスだけは、しっかり暗記しておいてください。

オテルに着いたらカフェで一休みしましょう。さっそくギャルソンにボンジュールです。夜はレストランでボンスワール。

ギャルソンたちとは、ボンジュールやボンスワールのおかげで、すぐに顔なじみになることうけ

あいです。

そして、翌日ふたたび行く時には、すでにボンジュールだけではなくて、顔なじみ同士の挨拶が必要です。

「コマンタレヴー？」とあなたが言うか、あるいはギャルソンが言います。「道に迷って、コマッタレブー」を思い出しませんか。

「トレ・ビアン」(たいへん元気です)と問われた方が答えます。「エ・ヴー？」(そして、あなたは?)

「トレ・ビアン」

こうして、トレ・トレ・ビアンに、フランスでの生活が始まります。